様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３９３２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２７１３

研究課題名（和文）子どもとの関係構築プロセスの自律的可視化による保育者の意識変容に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Childcare Teachers' Consciousness Transformation through Autonomous Visualization of the Process of Building Relationships with Children

研究代表者
上村　晶（UEMURA, Aki）

桜花学園大学・保育学部・教授

研究者番号：６０５５２５９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、Parallel-TEMを用いた子どもとの関係構築プロセスの自律的可視化による保育者の意識変容を明らかにすることである。初任・若手期の保育者6名へ協働的可視化と自律的可視化の2つの取組とインタビューを隔月に2年間実施し、わかり合おうとする意識の推移をライフライン・メソッドとTEMで分析した。その結果、保育者が関係構築プロセスを可視化することは、子どもとわかり合おうとする意識を涵養・体得する一助になること、他児との関係構築にも波及的・発展的に捉えて援用できる可能性があること、子どもとわかり合おうとする意識は保育者を取り巻く周囲の環境の影響を受けやすいことが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、保育者と子どもの関係性という視覚的に捉え難い事象を可視化し、わかり合いの実感の程度をグラフィティカルに描く取組である。保育者自身が日常的に流れ去る子どもとの関係性に注視しながら自ら描き続ける中で、その子との関係性の自覚化だけでなく他児との関係構築にも援用しようとするなど、子どもとの「わかり合い」を波及的に捉える志向性の体得につながるという意義がある。
　現在、不適切保育などが社会的に注目される中、本取組を研修等で活用することは、一方向的な子ども理解から「子どもと共に創る理解」へと保育者の意識変容を促す一助になり、保育者と子どもの共主体的な視座の獲得につながると考える。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study was to clarify the transformation of childcare teachers' consciousness through autonomous visualization of the relationship-building process with children using Parallel-TEM.
　In this study, two approaches, collaborative visualization and autonomous visualization, and interviews were conducted with six novice and young childcare teachers bimonthly for two years, and the transformation in their consciousness of trying to understand each other was analyzed using the Lifeline Method and TEM.
　As a result, the following were found: (1) autonomous visualization of the relationship-building process helps foster and acquire the consciousness of trying to understand each other with children, and (2) it is also possible to use this method to build relationships with other children spillover. In addition, it was also found that the childcare teacher's consciousness of trying to understand the child is easily influenced by the environment surrounding them.

研究分野：幼児教育学・保育学

キーワード：関係構築プロセス　自律的可視化　意識変容　若手保育者　Parallel-TEM　子ども理解

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

保育現場における 1・2 歳児の保育利用率の上昇（48.1％：厚労省，2019）など、近年高まりつつある保育・幼児教育への社会的ニーズを踏まえると、子ども理解に根差した情動的な関わり合いを通して、一人ひとりの子どもと個別具体的な関係を構築できる保育者の育成がより一層求められると考えられる。国際的には「保育の質」が注目されており、特に保育者と子どもの相互作用の質や保育プロセスの質をどう高めていくかが重視されている中（OECD, 2012、Siraj et al, 2015）、国内では、教師との温かい信頼に満ちた関係を基盤に子どものよさや可能性を理解しようとする重要性（文科省，2019）や、倫理的に裏付けられた専門的知識・技術・判断に基づいて保育を行う必要性（厚労省，2017）が提言されている。よって、保育の質の向上を試みる上で、保育者の子ども理解は保育実践の根幹を担う重要な概念であると捉えられる。

このような子ども理解研究を概観すると、従来の客観的・解釈的なわかり方から脱却する必要性（上野、1993）が指摘されると同時に、子ども理解は双方向的かつ一時的なものであること（田代，2009）、暫定的で常に更新され続けること（岡田，2005）などが示されている。また、保育者と子どもの相互主体的関係に基づき、相手の思いが通底的・浸透的にわかるような子ども理解の重要性（鯨岡，2011、室田，2016）や、情動的に子どもの内面を感じ取り対話や共有を通じて理解を深める二人称的アプローチ（Ready，2014）も注目されている。以上の知見を踏まえ、保育現場に根差した子ども理解とは、「保育者が子どもをわかる」という子どもを客体化した一方向的な理解に留まらず、「保育者が子どもとわかり合おうとする関係を構築すること」という保育者と子どもの関係性の視座から問い直すことが重要であると考えるに至った。

筆者の先行研究（上村，2022）では、質的研究法の複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling : TEM，サトウら，2012）に基づく Parallel-TEM（図 1）を用いて、保育者と子どもの感情が交叉・共有した瞬間に生じるわかり合いの実感を面積として可視化し、保育者と子どもの紡ぎだす関係性そのものを「1 つの帯状の総体」として描出し、分析・考察した。その結果、①子ども理解とは保育者が子どもと協働的にわかり合いを紡ぎだす能動性を有した絶え間ないプロセスであること、②保育者と子どもの二者間に閉じられた理解ではなく、子どもと保育者を取り巻く多様な文脈に開かれた理解であること、③子ども理解の熟達化とは、様々な視座の転換・獲得を通じてわかり合おうとする関係性が変容していくプロセスであること、などが見出されている。つまり、保育者と子どもの関係性は、非常に揺らぎやすい基盤の上に成立していることを自覚しつつ、常にわかり合おうとする意識を持ち続けることが、子ども理解の深化には重要であると言える。

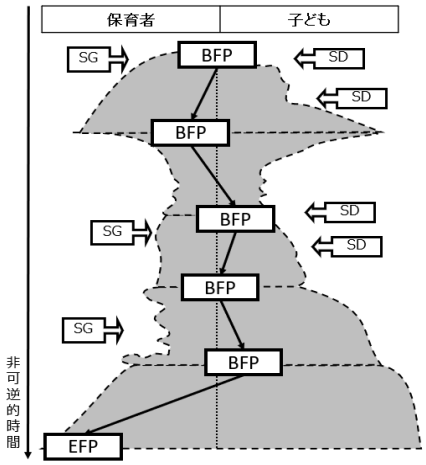

図 1：二者関係性を可視化した Parallel-TEM

その上で、初期キャリア段階の保育者に着目すると、1-5 年目の初任・若手期の離職が多く（厚労省，2013）、リアリティ・ショックに陥りやすい（谷川，2013）、多様な子どもを理解する難しさから困り感を抱きやすい（加藤ら，2013）などの知見が見られる一方、成功や失敗の狭間で揺らぎつつ自身の価値観を変容させながら場面に応じた適切な関わりができるようになる（上田，2014）ことも指摘されている。よって、初任・若手期は単なる未熟な段階ではなく、様々な価値を獲得していく可塑性に富んだ時期であり、この初期キャリア段階に客観的・解釈的な子ども理解から脱却して「子どもとわかり合おうとする志向性」を涵養・体得していくことは、子どもとの関係を構築していく上で重要な課題であると言える。また、このような志向性は、上位下達的な教導・伝達ではなく、保育者自身に意識変容を生み出すような体得が望まれる。

２．研究の目的

そこで、本研究では、相互主体的関係に着目した関係発達論（鯨岡，2011）に依拠しながら、初任・若手期の保育者と子どもの関係構築プロセスを Parallel-TEM を用いて自律的に可視化する取組が、保育者にどのような意識変容をもたらすのかを明らかにすることを目的とした。また、関係構築プロセスの可視化を通じて、保育者の意識変容に影響をもたらす外的要因を質的に解明し、保育者研修への援用可能性について提言する。

３．研究の方法

（１）**調査期間**：2020 年度～2022 年度

（２）**調査協力者**：初任・若手期の保育者 6 名（表 1）

（３）**調査方法**：2 年間の縦断的研究の各年度当初に 1 名の視点児の選定を依頼し、視点児と保育者の二者関係性を可視化する Parallel-TEM（上村，2019）を活用しながら、下記 2 つの取組と半構造化インタビューを 2 か月に一度の頻度でそれぞれ 1 年ずつ実施した。なお、

Covid-19 の感染拡大等に伴い、当初の予定より調査期間を延長して実施した。

① 第 1 段階：協働的可視化（視点児との関係を特徴づける語りとわかり合い曲線の描出に基づき、研究者が描出した関係構築プロセスの Parallel-TEM 案を見ながら協働的に対話して可視化する） ② 第 2 段階：自律的可視化（視点児との関係構築プロセスを保育者自身が自律的に Parallel-TEM で可視化後、二者関係を特徴づける具体的な出来事や背景要因等を研究者へ語る） ※ 保育者と子どもの関係性の広がりの線描は、第 1・第 2 段階の両取組において自ら描くよう調査協力者へ依頼した。また、第 2 段階の自律的可視化が取り組みやすくなるための前段階的・試行的な取組として、第 1 段階の協働的可視化を位置付けた。

その後、第 2 段階終了時に、わかり合おうとする意識の推移をライフライン・メソッド（Schrotts et. al., 1989）と TEM（安田，2019）を活用して線描・可視化するよう依頼し、両取組の比較や子どもとの関係構築に関する意識の変化に関する最終インタビューを行った。

表 1　調査協力者概要

保育者 調査開始時経験年数	第 1 段階 実施年度	視点児	年間インタビュー時間	第 2 段階 実施年度	視点児	年間インタビュー時間	最終インタビュー	備考
A 保育者 (1 年目)	2020 年度	4 歳女児	162 分	2021 年度	1 歳女児	144 分	40 分	
B 保育者 (1 年目)	2020 年度	2 歳女児	272 分	2021 年度	5 歳男児	117 分	27 分	担当変更のため 2 年目の協働的可視化は 11 月終了
C 保育者 (1 年目)	2020 年度	1 歳女児	161 分	2021 年度	2 歳男児	159 分	31 分	
D 保育者 (1 年目)	2021 年度	3 歳男児	149 分	2022 年度	3 歳男児	194 分	32 分	
E 保育者 (2 年目)	2020 年度	3 歳男児	133 分	2021 年度 2022 年度	3 歳男児 3 歳男児	118 分 182 分	33 分	2021 年度一次休職に伴い 2022 年度まで協働的可視化を実施
F 保育者 (1 年目) ※第 2 段階の実施は 4 年目	2017 年度	2 歳男児	264 分	2020 年度	1 歳女児	128 分	21 分	第 1 段階は 2017 年度に実施済み(月 1 回インタビュー)のため、第 2 段階の予備調査として実施

（４）**分析方法**：最終インタビューで得られたデータを逐語化した上で、SCAT（Step for Cording and Theorization：大谷，2019）と TEM（安田、2019）を採用した。まず、協働的可視化・自律的可視化における関係構築の差異などを踏まえた保育者の意識変容に関する語りから、SCAT を用いて構成概念を抽出し、ストーリー・ラインと理論記述を構成した。その後、重複・類似する構成概念を統合して抽象度を高めた上で、調査協力者の意識変容プロセスの径路を時系列に沿って配置し、TEM で可視化した。その際、調査の開始時点を示す「新年度開始」を始点とし、本調査の終着点として位置付く等至点（EFP：Equifinality Point）に「わかり合おうとすることを継続する」を設定した。また、EFP に至るまでのプロセスにおける〔分岐点：BFP（Bifurcation Point）〕、【社会的助勢：SG（Social Guidance）】、《社会的方向付け：SD（Social Direction）》に着目して分析した。

（５）**倫理的配慮**：日本学術振興会のガイドライン（2015）及び日本保育学会倫理綱領（2010）に則り、調査協力園の園長・保育者・視点児の保護者へ、口頭と文書で調査趣旨を説明し、個人情報保護を遵守して実施することを伝えた上で、研究協力の承諾を得た。また、本研究における調査協力者及び園名は全て仮名で取扱い、秘匿化することで人権に配慮した。なお、本学における研究倫理審査を受審し、実施許可を得た。

４．研究成果【SG：社会的助勢】《SD：社会的方向づけ》として付記

（１）予備調査結果

予備調査（F 保育者）の結果から、協働的可視化を実施した 1 年目と協働的可視化を実施した 4 年目において、わかり合おうとする意識が高まる実感を有していたことが見出された。一方、本取組を実施していない 2 年目は、【日常的に対話・省察できる同僚関係】に助勢されてわかり合おうとする意識が維持・向上していたこと、3 年目は《慢性的保育者不足》《心的多忙感》《日常的に対話できる同僚の不在》などに伴い、わかり合おうとする意識が低迷して迷走していた。

以上を踏まえ、㋐協働的可視化と外部他者との対話は、わかり合おうとする意識に影響を及ぼすこと、㋑可視化自体がわかり合おうとする志向性の涵養に資する可能性がある一方、園内の同僚との対話関係が構築できているか否かも重要であること、㋒自律的可視化は自己内対話を促進すること、が見出された。本結果を受けて、以下の本調査を実施・分析した。

（２）本調査結果

本調査では、継続して「協働的可視化→自律的可視化」という取組を実施した 5 名を対象とし

て分析した。その際、第 1 段階と第 2 段階において、3 歳以上児（幼児）と 3 歳未満児（乳児）で担当が変更した保育者が 2 名いた（A/B 保育者）。3 歳以上児の保育と 3 歳未満児の保育では、子どもの発達に応じた関わり方、保育者と子どもの人数比率、行事の多さなどに差異があり、関係構築途上においても保育者を取り巻く外的環境が異なることが推測されたため、担当が変更した A/B 保育者と、継続して乳児・幼児を担当した C/D/E 保育者を分けて分析した。

① 5 名に共通して見出された結果

まず、各保育者の意識変容に関する TEM 図を統合し抽象度を高めて描出した結果、「子ども理解志向期」「意思疎通志向期」「探索志向期」「感情共有志向期」「相互理解・他児波及志向期」の全 5 期に分類された。また、5 名に共通して見出された知見として、㋐協働的可視化（第 1 段階）の経験が自律的可視化（第 2 段階）を補完しており、自律的可視化の方がよりアクチュアルに描け、わかり合おうとする意識の自覚化につながること、㋑Parallel-TEM 図で関係構築プロセスを描くことにより、子どもとわかり合おうとする意識は関係性面積の拡張・縮小と連動する呼応性・連動性を有していること、㋒視点児との関係だけに注視する閉塞的志向ではなく他児との関係性にも波及的に捉える拡散的志向に発展すること、の 3 点が見出された。

加えて、わかり合おうとする意識の深化を促進・抑制する要因を類別した結果、「保育者の個人内要因」と「保育者を取り巻く環境的要因」の 2 種類が導出された（表 2）。

表 2　わかり合おうとする意識の深化を促進・抑制した要因

	わかり合いの深化を促進した要因	わかり合いの深化を抑制した要因
保育者の個人内要因	㋐視点児との直接的な関わり合い:【1 対 1 対応意識】【視点児心情優先志向】【視点児心情尊重志向】【環境再構成】【発達的課題への疑念】 ㋑,保育者の精神的側面【精神的ゆとり】	㋐視点児との直接的な関わり合い :《意思疎通困難感》《同時対応困難感》 ㋑保育者の精神的側面 :《余裕のなさ》《自信喪失感》《暗中模索》
保育者を取り巻く環境的要因	㋒園内業務量 :【業務軽減感】 ㋓園内の職員関係 :【職員連携・対話円滑化】【協働的な同僚性】 ㋔外部他者情報 :【家庭情報共有】【療育センター助言を生かした関わり方転換】	㋒園内業務量 :《行事多忙感》《業務多忙感》《非展望困難感》 ㋓園内の職員関係 :《非協働的同僚関係》《意思疎通困難感》《職員連携困難感》

② 乳児・幼児で担当が変更した場合と担当が継続した場合の差異

乳児・幼児で担当が変更した A/B 保育者の意識変容プロセス（図 2）では、2 年目の年度当初に《乳児/幼児担当変更の戸惑い》という SD が共通して見出されたと同時に、幼児との関係構築は、行事や業務の多忙さから慌ただしく大まかな省察に陥る可能性がある反面、乳児との関係構築は、ゆとりのある応答的な関わり合いの中で細部まで省察ができる可能性も見出された。

一方、乳児・幼児の担当が継続となった C/D/E 保育者の意識変容プロセス（図 3）に着目すると、2 年目の年度当初に【担当継続による展望性】という SG が顕在化しており、昨年度の経験を生かしながら見通しをもって関係構築を試みていたことが明らかになった。その反面、発達的課題に疑念を抱いた視点児を追跡した場合など、視点児特性の個別性・新規性によってわかり合おうとする意識は刷新されることが見出された。

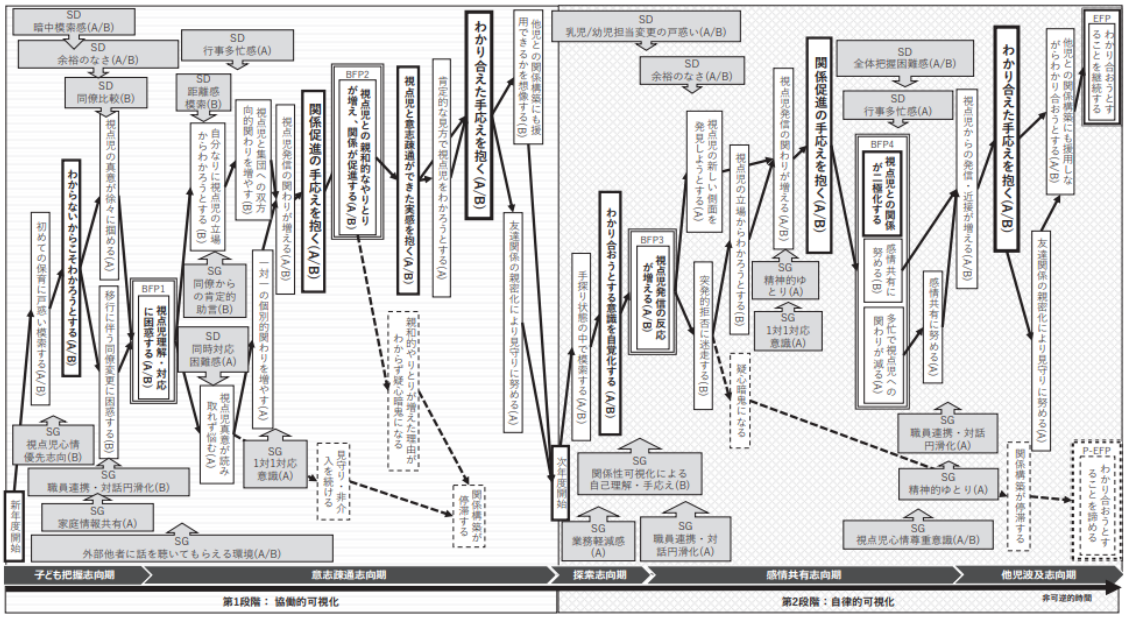

図 2　乳児・幼児で担当が変更になった保育者 2 名の関係構築プロセス可視化に伴う意識変容

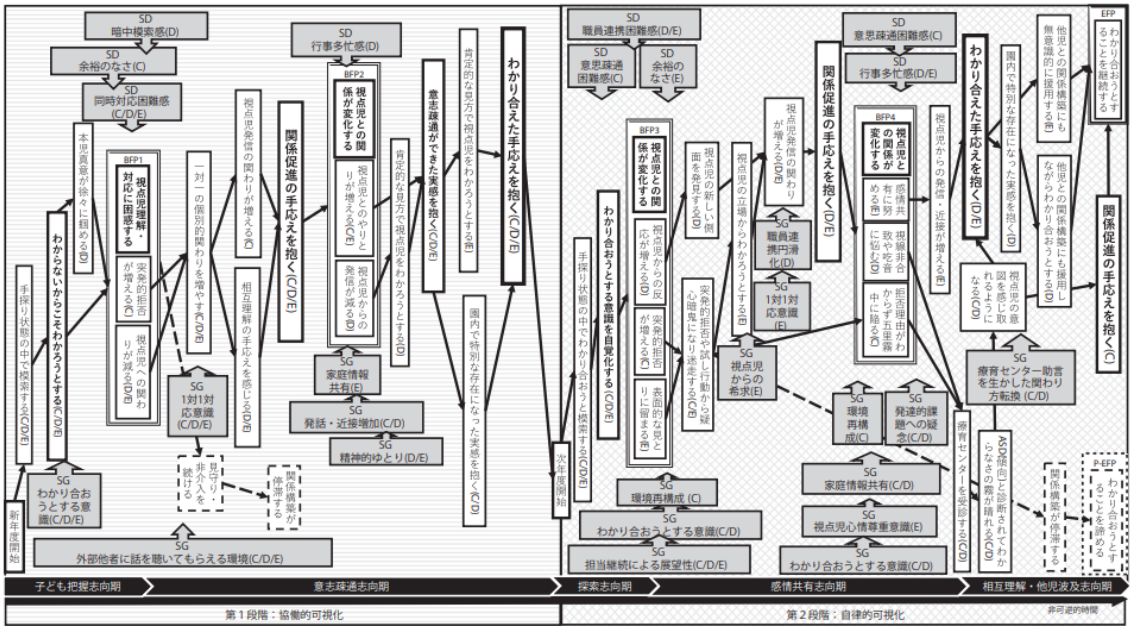

図 3　乳児・幼児で担当を継続した保育者 3 名の関係構築プロセス可視化に伴う意識変容

③　保育者と子どもの関係性が変化する転機

加えて、5 名の保育者が自律的可視化を通して関係促進の手応えをどのように抱いているかを明らかにするため、第 2 段階で関係が変化・促進した転機を発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：TLMG）を踏まえた TEM で微視的に分析した。その結果、保育者が「関係が促進した」と実感した背景には、保育者視座・子ども視座・共主体視座の 3 つの視座から捉えていたことが明らかになり、自律的可視化によって子どもとの二者関係を自覚的に捉えるだけでなく、徐々に「保育者視座から共主体視座へ」と捉え方を移行させる一助になることが示唆された。

（３）本研究から得られた示唆

以上から、初任・若手期の保育者にとって関係構築プロセスを自ら描いて可視化することは、日常的に流れ去る子どもとの関係性に注視し、子どもとわかり合おうとする意識を涵養・体得する一助になること、視点児との関係性の自覚化に留まらず、他児との関係構築にも波及的・発展的に捉えて援用できる可能性があることが明らかになった。加えて、子どもとわかり合おうとする意識は、保育者と子どもの二者関係の中だけでなく、保育者を取り巻く周囲の環境の影響を受けやすいことが見出されたため、特に実践経験の少ない若手保育者が子どもとわかり合おうとする意識を高めていくためには、保育者の意識を重層的に支えるよう、保育者を取り巻く多様な環境を整えていく必要があると言える。

最後に、保育者研修への援用可能性に関しては、下記の市町・連盟等から依頼を受け、実際に子どもとの関係性を自律的に可視化するワークショップを開催し、検討した。特に、「私と子どもと私の目に見えない関係を見える化できる取組が興味深い」「今後どのようになっていくかという期待感が持てる」「関係を築いていく上で具体的に心掛けたいことがイメージしやすい」「冷静に可視化したことで具体的な子どもの姿が見えてきた」「どのような状況になると子どもとの関係構築が希薄になるかなど、自分の課題・特性に気づけた」といった参加者の意見が散見された。同時に、「一人の子どもとの関係構築だけに注視してよいか」など、集団保育の文脈において一人の子どものみとの関係性を描くことへの戸惑いも聞かれた一方で、「関わり方に難しさを抱える子どもをじっくり捉えるきっかけになる」という前向きな意見もあった。

よって、じっくりと 1 名の子どもとの関係性の変化を追跡するようなイメージで、視点児を選定しながら関係性の可視化を研修に活用することは、現時点における視点児との関係構築を俯瞰的に捉えながら省察を深めるだけでなく、関係構築途上における自己覚知の促進や、子どもとの関係性を捉える新たな視座の獲得において有用であると考えられる。

①　愛知県岡崎市主催　岡崎市公私立保育者研修（3-5 歳児研修：3 回開催）2022 年 5 月 18～6 月 9 日	
②　三重県四日市市幼児教育センター主催　四日市市中級保育者研修　2023 年 7 月 25 日	
③　愛知県私立幼稚園連盟主催　中級教員研修　2024 年 6 月 21 日	

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 上村晶	４．巻 26
２．論文標題 保育者と子どもの関係性を可視的に描く意義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 9-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上村晶	４．巻 27
２．論文標題 Covid-19に伴う協力登園は保育者と子どもの関係構築にどのような影響をもたらしたのか	５．発行年 2023年
３．雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上村晶	４．巻 28
２．論文標題 子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容に関する縦断的研究(1)　―乳児・幼児との関係構築の差異に着目して―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上村晶	４．巻 29
２．論文標題 子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容に関する縦断的研究(2)　―乳児・幼児の継続的担当者における関係構築の差異に着目して―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上村晶	４．巻 62(3)
２．論文標題 外国にルーツのある子どもの発達的課題に気づき障害診断に至るまでのプロセス　―関係構築過程における保育者の葛藤に着目して―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 保育学研究	６．最初と最後の頁 印刷中(2024年12月予定)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 保育者と子どもの関係性を可視的に描く意義とは
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Aki UEMURA
２．発表標題 How Does Visualizing the Process of Building a Teacher Child Relationship Change the Mindset of Childcare Teachers?
３．学会等名 PECERA 22nd Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 3歳未満児との関係構築プロセスを可視化することは保育者にどのような意識変容をもたらすのか　―2年間の縦断的研究を通した“わかり合おうとする意識の推移”に着目して―
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第32回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 外国にルーツがあり発達に疑いのある園児との関係構築過程における保育者の葛藤
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容とは(3)　―幼児と乳児の関係構築の差異と保育者を取り巻く外的環境に着目して―
３．学会等名 日本保育学会第76回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 実践者と研究者の狭間で生成された保育者の子ども理解に関する“問い”とは
３．学会等名 日本保育学会第76回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容とは ―Parallel-TEMを用いた協働的可視化と自律的可視化の取組の差異に着目して―
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容とは（2）　－子どもとわかり合おうとする意識の推移に着目して－
３．学会等名 日本発達心理学会32回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 Covid-19に伴う協力登園は保育者と子どもの関係構築にどのような影響をもたらしたのか
３．学会等名 日本保育者養成教育学会第6回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 保育者と子どもの関係性を可視的に描く意義とは
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Aki UEMURA
２．発表標題 Longitudinal research on the transformation of childcare teachers’ consciousness by visualizing the process of relationship building with three year old children
３．学会等名 PECERA 23nd Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容とは(4) ー3 歳児との関係構築の実相に着目してー
３．学会等名 日本質的心理学会第20回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 幼児の発達的課題に気づき関係機関の診断に至るまでの保育者の葛藤と配慮
３．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 上村晶
２．発表標題 保育者と子どもの関係性が変化する転機の微視的分析 ―関係構築プロセスの自律的可視化を通して―
３．学会等名 日本保育学会第77回大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

その他、本研究成果を生かし、保育者と子どもの関係構築プロセスを自律的に可視化する保育者研修を、以下の市町・連盟等で実施し、社会的還元を図った。 ①愛知県岡崎市主催　岡崎市公私立保育者研修（3-5歳児研修：3回開催）2022年5月18～6月9日 ②三重県四日市市幼児教育センター主催　四日市市中級保育者研修　2023年7月25日 ③愛知県私立幼稚園連盟主催　中級教員研修　2024年6月21日

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関